

日韓における「災害遺産」 ～東亜大学校を迎えて～ 東アジアの新たな協働を考えるV

日時：2020年2月7日（金）13:00～15:00
会場：関西学院大学災害復興制度研究所会議室

関西学院大学災害復興制度研究所 副所長・人間福祉学部教授

山 泰 幸

関西学院大学災害復興制度研究所では、2016年1月から「東アジアの新たな協働を考える」をテーマにした国際シンポジウム・合同研究会を開催してきた。第5回目となる今回は、2020年2月7日（金）に、韓国の東亜大学校から研究者を迎えて、「日韓における『災害遺産』～東亜大学校を迎えて～東アジアの新たな協働を考えるV」と題して、東アジアにおける「災害遺産」に関する共同研究に向けて、合同研究会を行なった。

東亜大学校は、首都ソウルにつぐ韓国第二の都市、釜山広域市に所在する私立の名門校である。2016年9月12日に、韓国の観測史上最大規模となったマグニチュード5.2の前震、5.8の本震が発生した慶州地震の影響によって、韓国においても地震災害に関する関心が高まっている。そうした背景のなか、2017年2月10日に、韓国・東亜大学校考古美術史学科から教員2名、学生25名、事務員1名の総勢約30名が、本研究所を訪問した。この訪問をきっかけとして、その後、考古美術史学科（2017年締結）および同校石堂学術院（2019年締結）と協力協定を結ぶことになった。2017年11月15日には、マグニチュード5.4の浦項地震、2018年2月11日には、この余震とされるマグニチュード4.6の地震が浦項市で発生するなど、韓国では、地震災害に関する関心がさらに高まっている。

研究会では、本研究所を代表して、長岡徹所長から歓迎の挨拶があり、つづいて東亜大学校側を代表して、朴銀卿教授から挨拶があった。朴教授は、東亜大学校人文大学学長、韓国全国私立大学人文大学学長協会会長ほか、韓国政府の大学関係の委員を歴任しており、韓国の人文学を牽引する人物であり、東亜大学校石堂学術院長時に同学術院内にヘリテージ研究センターを設立し、現在、センター長を務めている。また、研究所の相互協力協定時の東亜大学校側の署名者である。

副所長の山から趣旨説明がなされた後、野呂雅之主任研究員・



教授から「『人間復興』の実現に向けて～災害復興制度研究所の研究・活動」と題して、本研究所の活動の概要について報告がなされた。朴銀卿教授から、「東亜大学校石堂学術院の研究・活動」と題して、石堂学術院が多数の文化財を有する韓国随一の博物館を備えており、また、石堂学術院の建物自体が、朝鮮戦争時の韓国臨時政府が設置された文化財であることなどが報告された。金正善助教授から、「東亜大学校考古美術史学科の研究・活動」と題して、1987年に考古美術史学科として韓国で3番目に創設された学科で、考古学と美術史、博物館学を中心とする講義があり、現在、専任教員7名、在学生約110余名、約1100の卒業生を輩出していることが報告された。その他、東亜大学校客員教授で文化財庁研究員の金鎮順氏、大学院生の李賢珠氏が参加し、本研究所側からは、金太宇社会学部准教授、斉藤容子指定研究員が参加した。金太宇准教授は、2017年の東亜大学校の本研究所訪問時に通訳を担当した縁もあり、今回も参加していただいた。

参加者全員が自己紹介を兼ねて研究紹介を行った後、斉藤研究員の司会のもと、今後の研究交流について、和やかな雰囲気の中意見交換を行った。

本研究所では、2012年度に、韓国・高麗大学校との学術フォーラムを開催し、その成果を『東日本大震災と日本——韓国からみた3.11』として出版したのを皮切りに、2016年1月には、中国・韓国の研究者を招いての日中韓・国際学術シンポジウム「巨大災害からの復興～東アジアの新たな協働を考える」を開催し、その後、「東アジアの新たな協働を考える」をテーマにして、毎年、国際シンポジウムや合同研究会を開催するなど、国際学術交流を進めている。今後も東アジアの研究機関との学術交流を積極的に進めていきたいと考えている。

